

「朝鮮国王国書写」（毛利家文庫第五分冊3他家4）

戦いと友好⑤

## 朝鮮通信使

室町時代から江戸時代にかけて李氏朝鮮より日本へ派遣された外交使節団を、一般に朝鮮通信使とよんでいます。室町時代には倭寇への禁圧を日本に要請すること等を目的として、15世紀前半に3回来日しています。

### 【秀吉時代の通信使】

その後150年ほどたち、豊臣秀吉の時代になると、明の征服を企図した秀吉は、対馬の宗氏に対して朝鮮国王を服属させるように命じましたが、朝鮮との貿易を重視する対馬は朝鮮に服属は求めず、日本を統一した秀吉を祝う使節を朝鮮に求めました。

これが天正18年（1590）の通信使で、上の写真はそのときにもたらされた国書の写しとされるものです。

秀吉はこの通信使を服属使節として扱ったようですが、朝鮮王朝には、信使の内紛もあって「秀吉に侵略の意図なし」と伝わったようです。

その後、秀吉は文禄・慶長の役（韓国では「壬辰倭乱」が一般的）をおこしました。

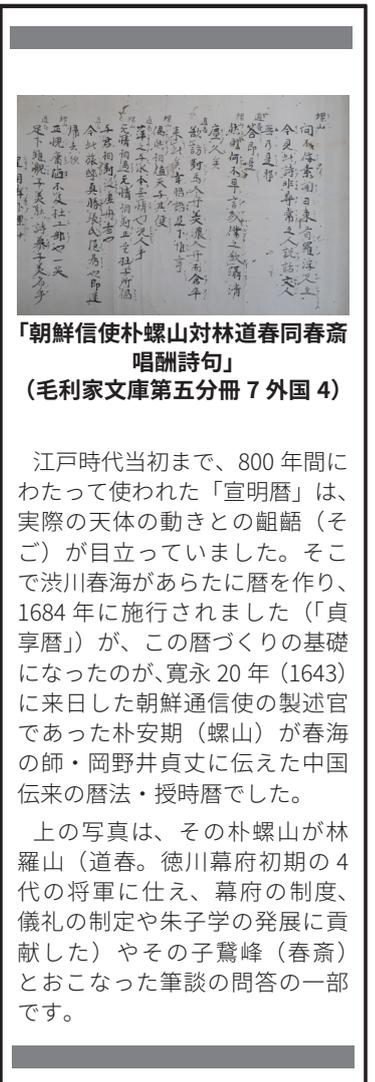
### 【江戸時代の通信使】

江戸時代には、日本と李氏朝鮮国は正式な国交をむすび、貿易のみならず、「通信（信＝よしみを通じる）」の国として、きわめて友好的な関係にありました。日本の将軍の代替わりや世継ぎ誕生のうちに、通信使は国書を携えて計12回来日し、外交のみならず文化や学問交流の面でも大きな役割を果たしました（右写真参照）。

さて、朝鮮通信使の一行は京城（現ソウル）を出て釜山から出航し、対馬・筑前藍島を経由して、関門海峡から瀬戸内海を大坂近辺まで進みました。その間、萩藩およびその支藩は下関と上関で接待をおこないました。

大坂からは淀川の喫水が浅いため、一行は日本の船に乗り換え、さながら水上パレードのようにして京まで進みましたが、そのときに、幕府船や安芸・備後等の船とならんで、毛利氏が大坂に置いていた「川御座船」が使われました。

川船を提供した各大名家は紋章の入った幔幕を張り、きらびやかに船上を飾って華美を競いました。



「朝鮮信使朴螺山対林道春同春齋唱酬詩句」（毛利家文庫第五分冊7外国4）

江戸時代当初まで、800年間にわたって使われた「宣明暦」は、実際の天体の動きとの齟齬（そご）が目立っていました。そこで渋川春海があらたに暦を作り、1684年に施行されました（「貞享暦」）が、この暦づくりの基礎になったのが、寛永20年（1643）に来日した朝鮮通信使の製述官であった朴安期（螺山）が春海の師・岡野井貞丈に伝えた中国伝来の暦法・授時暦でした。

上の写真は、その朴螺山が林羅山（道春。徳川幕府初期の4代の将軍に仕え、幕府の制度、儀礼の制定や朱子学の発展に貢献した）やその子鷲峰（春齋）とおこなった筆談の問答の一部です。

下の写真は、正徳元年（1711）の来朝の時、「上々官第三船」として提供された毛利氏の川御座船の図です。参勤交代の際に海路を利用する西国大名は、大坂に川御座船をもっていました。

この川御座船図は全長約250cmあります。通信使の

淀川上りの際の「朝鮮信使御記録」（下写真）の第8冊には「川船惣長 拾四尋五寸」（1尋=6尺として25.6m）とあり、図が原則どおり1/10のスケールで作られていることがわかります。

通信使一行は、京からは陸路で江戸に向かいました。

「御座船之図」（毛利家文庫58絵図990）



▶当館には、朝鮮通信使に関して

「朝鮮信使一件」（毛利家文庫42御勤事62）47点（右写真）

「宝暦十三年朝鮮通信使記録」（同御勤事86・87）182点、

「朝鮮信使御記録」（県庁伝来旧藩記録877～889）13点

「朝鮮人来聘記」（徳山毛利家文庫）17点

などのまとまった記録があるほか、毛利家文庫遠用物にも数多くの関係史料があります。



「朝鮮信使一件」（毛利家文庫42御勤事62）

▶そのうち、県庁伝来の「朝鮮信使御記録」13点は、ユネスコの記憶遺産申請リストに搭載されています。



「朝鮮信使御記録」（県庁伝来旧藩記録877～889）